

中央アジアにおける聖者崇拝の実態

川本 正知

私たちが、「イスラム教の聖者」と訳す言葉は、アラビア語のワリーwalīであり、現世・来世いずれにおいても「神の側近くにいる人」という意味である。一般的に、イスラム教における聖者とは、旧約聖書に現れるイスラム以前の預言者たち、イスラムの預言者ムハンマドに直接教えを受けたサハーバṣaḥāba「教友」とよばれる最初期のイスラム教徒たち、サイドsayyidとかアシュラーフ ashraf とよばれる預言者ムハンマドの血縁者たち、シーア派のイマームたち、ガザー ghazā とよばれるイスラム拡大の聖戦において殉教したガーズィーghāzīとよばれる聖戦戦士たち、著名なイスラム法学者たち、巨大なスーフィー教団の始祖とみなされているような偉大なスーフィーたちなどが死後に祀られ、霊廟が崇拝の対象となっている人たちのことを指す。また、そういった聖者廟をマザールmazārとよび、聖者廟参詣をズィヤーラziyāraと言う。

これらの聖者たちのほとんどは、なんらかの意味でイスラム教の拡大に一定の役割を果たしたとされている人びとである。ここでのイスラム教の拡大とは、空間的に広がっていくことだけを意味するのではなく、宗教としての大衆化や民衆文化としての深まりも意味している。特に有名で由緒ある聖者たちは、イスラム教の歴史の展開の様々な側面を代表している。また、特定地域のみ知られた聖者廟および聖者も、それぞれの地域のイスラム教の拡大に一定の役割を果たしたとされる人びとであり、それ故に聖者とされたのである。容易に想像されるように、これらの聖者たちの在り方は、特定の地域のイスラム化の進展の諸相を反映している。

中央アジアにおいては、約70年間のソヴィエト連邦時代に、聖者崇拝・聖者廟参詣は、迷信、狂信の類とされ、ほとんど全ての聖者廟は経済的基盤であったワクフを奪われて放置され、少数の有名な廟を除いて倒壊し、かつての聖者廟の姿を想像することは難しい。しかし、数種類の聖者廟案内と地誌によって、それらのうちの主要な聖者廟の「謂われ」を知ることができ、その内容が指し示す聖者像は、やはり中央アジアのイスラム化の進展の歴史的諸相を反映しており、それぞれの聖者をそういった意味での歴史的的存在として捉え

ることができる。

19世紀以前の聖者廟の在り方として、カザフスタン共和国の研究者ムミノフ・アシルベクは次のように述べている。

推定によれば、中央アジアにおける聖所の数は約一万であり、フェルガナ盆地だけでも千を超える聖地がある。一つひとつの聖地は、特定の地域的特色を持つイスラム信仰の基本的要素である。

全ての墓や廟が、聖なる地位を保っているというわけではないが、聖地は、普通、トグ *tugh* (馬またはヤクの尻尾のついた竿) によって〔聖なる地として〕区別される。ほとんどの聖地は、管理人 (*chiraqchi*) またはコーラン読み (*qari*) が居る。また、多くの聖地は、宗教建築群 (廟、ハーンカーフ、マドラサ) と巡礼者のための宿泊所とそれらに必要とされる基本的施設 (モスク、沐浴場、コーランを読む部屋、職員家屋) を持っている。中央アジアには大変多くの聖地が存在するが、それら全てを網羅するリストは存在しない⁽¹⁾。

ここに述べられている聖地とされる聖者廟の姿は、現在のものではなく、それらが機能していた19世紀以前の姿である。

実際、19世紀には、トグとアラム *'alam* (旗) によって「聖地」として区別されるマザールは中央アジアの至る所に存在した。

ソヴィエト時代の調査によれば、19世紀の終わりから20世紀の初めの城郭都市ブハラは人口約8万人で、その中は220の *kū* とか *gudhar* と呼ばれる街区に分かれていたが、城郭内に百程のマザールが、約半数の街区に存在し、「著名なマザールにはその護持にあたりながら多数の参詣者から喜捨を受けるシャイフが居たが、多くのマザールは、地区内の「聖地」として崇敬を受けていた。」とされている⁽²⁾。また、20世紀の初めにおいても、詳細なブハラ・オアシスの聖者廟案内『巡礼者たちの贈り物』⁽³⁾が書かれた。

1863年にサマルカンドを訪れたヴァーンヴェーリは、「ここには、訪問すべき聖地が約百ヶ所ばかりあり、巡礼者は、その人や聖域についての優れた由緒に応じて、暗記したある一定の順序に従って訪問するのである。」⁽⁴⁾と述べている。また、1835年に書かれた、地誌の

⁽¹⁾ Muminov Ashirbek, *The Sacred Places in Central Asia: Attempts of Their Historical and Theological Interpretation, Proceeding of International Conference "Mazars in Ferghana and Xinjiang"*, November 26-7, 2005, Tokyo.

⁽²⁾ 小松久男「ブハラのマハッラに関するノート——O.A. スーハレワのフィールド・ワークから——」『アジア・アフリカ言語文化研究』16、1978年、180頁。

⁽³⁾ Nāṣir al-Dīn Tūrā b. Amīr Muẓaffar al-Ḥanafī al-Ḥusaynī al-Bukhārī, *Tuḥfat al-Zā'irin*, Bukhārā, 1910.

⁽⁴⁾ ヴァーンヴェーリ・A.、小林高四郎他訳『ペルシア放浪記』平凡社、1965年、225頁。

形態を取ったサマルカンドの名所案内『サマリーイエ』⁹⁾は、広くサマルカンド・オアシス全体の60以上のマザールを載せており、その内容はまさにサマルカンド・マザール参詣手引き書である。

また、大きな聖者廟が都市から離れたオアシス内の集落にある場合は多い。それらの周りには関連する聖者のマザールが建てられ、聖者廟近くへの埋葬を望む王侯貴族たちのマザールが建てられたりして、集落全体が聖地となっているような景観を今日でも見ることができる。

例えば、ヤサヴィー教団の始祖ホージャ・アフマド・ヤサヴィー(1166/7没)のヤサヴィー廟のあるトゥルクスタン市、ブハラのナクシュバンディー教団の開祖バハー・ウッディーン・ナクシュバンド(1317-1389)の聖廟のあるカスレ・アーリーファーン村、おなじくブハラのナクシュバンディー教団の「ジュイパールのホージャたち」と呼ばれる一族の墓廟建築群チャール・バクルのスマタンSumitan村などである。

19世紀に、これらの無数のマザールが全て参拝・参詣の対象になっていたとは考えられないし、聖者崇拜現象における個々のマザールの重要性は、参詣者の多少によってのみ判断することは難しい。しかし、19世紀以前の中央アジアの聖者崇拜・聖者廟参詣の実態について、概ね、次のように言うことができるだろう。

一地方、一都市、一街区、一村または一つの職業集団、一つのスーフィー教団など様々なレベルの人間集団が、それぞれの聖者崇拜・聖者廟参詣に関わっており、聖者たちは、それぞれの集団アイデンティティーの象徴としての役割を担っていた。もちろん、これらの集団アイデンティティーは重層的であり、かつ時代によっても変化するので、崇拜・参詣の対象の聖者や聖者廟も変わり、祈願の内容は言うまでもなく、崇拜・参詣の持つ意味も変化し続けてきたであろう。

19世紀に見られる多くの聖者廟は、その大半は象徴としての役割を終えた存在であり、その由来はほとんど忘れられていたであろう。しかし、19世紀まで、中央アジアにおいては、聖者が象徴的に支える現象世界の枠組みはそのままであり、聖者廟の存在は、人びとが生きていくための信仰の拠り所として必要不可欠な意味を持ち続けていた。また、それこそが過去の中央アジアのイスラム信仰の実態であった。

(奈良産業大学経済学部)

⁹⁾ Abū Ṭāhir Khwāja-i Samarqandī, *Samariya*, ed. Īraj Afshār, Tehran, 1965.